

北海道中央部，佐幌岳とその周辺におけるエゾナキウサギの生息地

ひがし大雪博物館友の会ナキウサギ調査グループ¹⁾

The habitat of Northern Pikas, *Ocotona hyperborea yesoensis* at Mt. Sahoro and its surrounding area, central Hokkaido

Northern Pika research group of Higashi Taisetsu Naturalist Club¹⁾

はじめに

エゾナキウサギ *Ocotona hyperborea yesoensis* (以下、ナキウサギという) は、北海道中軸部の山岳地帯 (中央高地, 日高山脈, 夕張山地など) に分布し (図1), 岩塊地 (岩が積み重なったところ) に生息する。日高山脈の北端に位置する佐幌岳 (標高1059.4m) の東斜面の岩塊地 (標高760m付近, 図2の1) で, 1987年にナキウサギの糞が発見された (川辺 1989)。しかし, この岩塊地は岩の堆積状態から繁殖個体群を安定的に維持できるほどの規模とは考えられなかった。このため, 近くに未発見の生息地がある可能性が出てきた。そこで, 佐幌岳とその周辺においてナキウサギの生息を明らかにするため調査を行ない, 若干の知見が得られたので報告する。

調査地の概要と調査方法

南北140kmに及ぶ日高山脈は, 佐幌岳付近から高度を減じ, 佐幌岳の北方約6kmのところまで終わる。剣山以北の日高山脈は, 貫入した花崗岩によって山体がつくられている (橋本 1971, 国府谷ほか 1969)。そして, 佐幌岳の北に続く地域は, かつての大規模な火山活動によって噴出した火砕流が堆積してできた溶結凝灰岩の台地である (橋本 1971, 小山内ほか 1968)。今回は花崗岩が分

布する佐幌岳と佐幌岳の南方約13kmに位置するオダッシュ山そして溶結凝灰岩が分布する佐幌川・パンケニコロ川・パンケキナウシ川・ペンケナイ川・十勝川・シーソラプチ川流域において調査を行なった。調査の日程は, 以下の通りである。

- 1991年6月29日 佐幌岳北斜面
- 1991年10月9日 空知川流域
- 1993年10月4日 オダッシュ山北東斜面
- 1993年10月17日 佐幌岳北方尾根
- 1994年10月23日 佐幌川流域, パンケニコロ川流域



図1. 北海道におけるナキウサギの地理的分布。川辺 (1992) を一部改編。

Fig. 1 Distribuion of Northern Pikas in Hokkaido

1) 阿部彰一, 河井大輔, 川辺百樹*, 貴志浩子, 北川雅弥, 久保進, 小葉松弘恵, 鈴木利典, 島田雄吉, 立花良秋, 種田奈美, 辻本涼子, 垂沢豊, 比企知子, 平田正明, 平田道子, 牧田英男, 牧野靖博, 松田まゆみ, 丸山立一, 森幸佑, 山下征夫, 山田和幸, 山田真弓, 米山千昭, 渡辺幸子 (*は執筆責任者)
 ひがし大雪博物館気付 〒080-1403 北海道河東郡上士幌町字糠平 c/o Higashi Taisetsu Museum of Natural History
 Nukabira, Kamishihoro, Kato-gun, Hokkaido 080-1403 Japan.



図2. 佐幌岳付近の調査地(1~5). 国土地理院発行20万分の1地勢図「夕張岳」使用
 Fig. 2 Study sites (1~5) at Mt. Sahoro and its surrounding area.

1997年10月26日 十勝川流域, チカベツ山, パンケキナウシ川流域

1998年9月20日 佐幌岳北方尾根

調査人員は延べ42人であった。現地ではまず岩塊地の発見に努め、岩塊地を発見した場合には、堆積した岩の隙間をのぞきこみ、糞や貯食植物を探した。

結 果

1) 佐幌岳(標高1059.5m)

北斜面の標高750~880mの沢型地形のところには岩塊地があり(図2の2)、標高850m付近の2ヶ所で糞を発見した(1991年6月29日)。佐幌岳の山頂から北西へ1.5kmほどのところにある標高1036mのピーク(以下、1036mピークという)付近に約1.5ha(現地で測量できなかったため、地

図からの読み見取りによる)の岩塊地があり(図2の3, 図3), ここで古い糞(3か所)と古い貯食植物(シダ植物, 1か所)を発見した(1993年10月17日). 糞と貯蔵された植物の鮮度からこの年のものではないことは明らかであった(図4)が, どれくらいの時間が経っているかは判断できなかった. なお, ナキウサギの鳴き声を聞くことはできなかった. 1998年9月20日に調査を行なったところ, 貯食植物と糞があったが, いずれも1993年に発見されたものであった. つまり, 少なくとも1993年以降ナキウサギは生息していないということである.

2) オダッシュ山(標高1097.7m)

北東斜面の標高840~940mの沢型地形のところらに岩塊地(幅約10m, 長さ約150m)があった(図2の4)が, 糞や貯食植物などは発見されなかった.

3) 佐幌岳北方の溶結凝灰岩台地

パンケニコロ川の標高400m付近(図2の5)と十勝川の標高500m付近(図2の6)に岩塊地があったが, 糞や貯食植物などは発見されなかった.

佐幌川流域とパンケキナウシ川流域では岩塊地を発見できなかった.

4) 佐幌岳西方の溶結凝灰岩台地

シーソラプチ川流域の北落合(標高440m)から芳白橋(標高600m)まで間では岩塊地を発見できなかった.



図3. 佐幌岳北方の1036mピークの岩塊地
(写真川辺百樹)

Fig. 3. The block field at 1036m peak of Mt. Sahoro.

考 察

佐幌岳の東斜面の近くに未発見のナキウサギの生息地があるだろうとの予測のもとに今回調査を行なったところ, 佐幌岳の2ヶ所の岩塊地でナキウサギの生活の痕跡である糞や貯食植物を確認できた. しかし, ナキウサギの生息にとってこのあたりで最も好適と考えられた1036mピークの岩塊地は, 1993年以降ナキウサギが生息した痕跡はなかった. つまり, 佐幌岳とその周辺でナキウサギの繁殖個体群を確認することはできなかった.

では, 佐幌岳に糞や貯食植物を残したナキウサギは, どこからきたのであろうか. これには次の3つの可能性が考えられる.

- 1) 佐幌岳とその周辺にまだ発見されていない繁殖個体群の生息地があり, そこから分散してきた個体が糞や貯食植物を残した.
- 2) かつて1036m尾根の岩塊地に繁殖個体群が存在し, 彼らが糞や貯食植物を残した.
- 3) 佐幌岳とその周辺には繁殖個体群の生息地はなく, 中央高地あるいは日高山脈(パンケヌーシ岳以南)の生息地から分散してきた個体が糞や貯食植物を残した.

ナキウサギは, 採食時や移動時に岩塊地から離れることはあるが, 彼らが岩塊地でないとこで繁殖したという事例は, 少なくとも北海道では知られていない. テレメトリー調査によると, 彼らは4200~11530 m^2 の行動圏をもつ(小野山ほか



図4. 佐幌岳北方の1036mピークの岩塊地のナキウサギが貯蔵した植物(写真渡辺幸子)

Fig. 4. The scats and plants stored by Northern Pikas in the block field at 1036m peak of Mt. Sahoro.

1991). したがって、ナキウサギの繁殖個体群が安定的に維持されるためには、複数のつがいが生活できる面積の岩塊地が必要となる。岩塊地はどこにでもあるわけではない。岩塊地の形成には、ブロック状に壊れる性質をもつ岩石(花崗岩、安山岩、溶結凝灰岩など)が不可欠である。そして、場合によってこのような岩石が風化作用を受けやすい状態にあったという地形条件が関係する。

今回調査を行なった佐幌岳とその周辺には、ブロック状に壊れる性質をもつ花崗岩と溶結凝灰岩が広く分布している。今回の調査地では花崗岩の場合、岩塊地に2つのタイプが認められた。つまり、①斜面上部の露岩が風化作用をうけ、落下した岩塊が斜面中腹に堆積してできたもの(佐幌岳の北斜面とオダッシュ山の北東斜面の岩塊地)と②山稜の岩峰が風化作用をうけ、生産された岩塊がその場に堆積してできたもの(佐幌岳1036m尾根の岩塊地)である。また、溶結凝灰岩の場合、岩塊地は、河川の浸食によってできた溶結凝灰岩の急崖が風化作用をうけ、その下部に岩塊を堆積させたものであった(パンケニコロ川の標高400mと十勝川の標高500mの岩塊地)。

花崗岩の①のタイプの岩塊地は、沢型地形にあるため、降雨時や融雪時に岩塊地に流水が発生しやすい。また溶結凝灰岩の岩塊地は、岩の堆積量が少ないうえ主に巨礫からなるため、岩と岩がつくる空隙が乏しかった。このような岩塊地は、ナキウサギの生息にとって好適ではないらしい。このようなことから、この地域では花崗岩の②のタイプ、つまり山稜に形成された岩塊地が、ナキウサギの繁殖個体群の存在を可能にすると考えられる。しかし、佐幌岳1036mピークを除き、オダッシュ山以北の日高山脈の山稜上にこのタイプの岩塊地を認めることはできなかった。したがって、「佐幌岳とその周辺にはまだ発見されていない繁殖個体群の生息地があり、そこから分散してきた個体が糞や貯食植物を残した」という可能性は低い。また、このことは1036m尾根の岩塊地が孤立した生息地であるということの意味している。この岩塊地に5年以上ナキウサギの移住個体の痕跡がみられなかったということは、ここへのナキウサギの移住が難しいことを物語っている。このよ

うに他の生息地からの移住が難しく、収容力が限られた小規模な岩塊地でナキウサギの繁殖個体群が安定的に維持されてきた可能性も低いとみなさなければならない。したがって、「かつて1036mピークの岩塊地に繁殖個体群が存在し、彼らが糞や貯食植物を残した」可能性より「中央高地あるいは日高山脈(ペンケヌーシ岳以南)の生息地から分散してきた個体が糞や貯食植物を残した」可能性の方が高いと考えられる。

謝 辞

本稿の作成に当たり、岩見恭子氏(岩手大学連合大学院)に貴重な助言をいただいた。また英文の作成にあたり斎藤潤氏(ひがし大雪博物館友の会)に協力をいただいた。両氏に厚くお礼申し上げたい。

文 献

- 国府谷盛明・松井公平・土屋篁, 1969. 5万分の1地質図幅説明書「新得」, 1葉+27pp., 北海道開発庁。
 小山内熙・酒匂純俊・松井公平・松下勝秀, 1968. 5万分の1地質図幅説明書「西達布」, 1葉+23pp., 北海道開発庁。
 小野山敬一・車田利夫・大見謝伸二, 1991. 行動圏。「野生動物分布等実態調査報告書—ナキウサギ生態等調査報告書」(北海道保健環境部自然保護課), pp.66-94. 北海道。
 川辺百樹, 1989. 十勝地方北部において最近発見されたナキウサギの生息地。ひがし大雪博物館研究報告, 11: 19-22。
 ———, 1992. ナキウサギの分布と地質要因(1)。ひがし大雪博物館研究報告, 14: 103-106。
 橋本誠二, 1971. 5万分の1地質図幅説明書「佐幌岳」, 1葉+32pp., 北海道開発庁。

Summary

We investigated the habitat of Northern Pikas at Mt. Sahoro and its surrounding area from 1991 to 1998. We found plants stored by them at Mt. Sahoro on 17 Oct. 1993. But we did not find any habitats of their breeding population in the above mentioned area. The individuals which left scats and stored plants at Mt. Sahoro most likely came from the central mountain district of Hokkaido or the south of Mt. Penkenushi in Hidaka mountains.